保育士養成の向上につながる現場と養成校との協働についての一考察
～実習指導者が抱える課題と養成校の役割～

熊谷　賢（専修大学北上福祉教育専門学校）　藤田　清澄（盛岡大学）
白石　雅紀（修紅短期大学）　石川　正子（盛岡大学短期大学部）
櫻　幸恵（岩手県立大学）　橋場　早苗（盛岡医療福祉専門学校）
徳増　全矢（専修大学北上福祉教育専門学校）岸　隆子（専修大学北上福祉教育専門学校）

１．問題意識と研究目的

全国保育士養成協議会は「効果的な実習のあり方に関する研究」を基に『保育実習指導のミニマムスタンダード』を作成している（2005）が、これを実践するためには養成校と保育現場の協働なしには考えられない。しかし、保育士養成協議会の専門委員会課題研究報告（2014）によると、養成校教員と、保育現場の保育者との間には、多くのギャップがあることが示されている。特に保育者の専門性の育ちのプロセスにおいて、「仕事の遂行力」や「日々の保育を実践するためのスキル」などの専門性を、養成校教員は実習を中心に養成段階でも経験する内容であると捉えていたが保育現場の者は勤務開始後 1，2 年程度をかけて獲得するものと考えている様子が示されている。また、残念ながら保育現場からは専門性獲得に対する協働のパートナーとして、養成校に対し期待していないという現実もあることを示している。しかし、ともに保育士を養成していく一つの場面であると考えられる保育実習指導において、協働という視点は不可欠であると考えられる。

本研究では、保育現場が保育実習指導における養成校との協働をいかに捉えているかについて岩手県の現状を調査し、岩手県の養成校としてどのような協働ができるのかを検討・提言することを目的とする。

２．調査方法・倫理的配慮

岩手県内の保育所と認定こども園 179 園を対象に 2016 年 2 月～2016 年 3 月の間に行った。質問紙調査については各園の実習指導者を対象とした。質問紙郵送法で実施し、回収率は 69.2％だった。

３．結果１　実習指導体制、実習指導者研修会について

調査結果より、保育士経験が長い主任保育士が実習指導を担当する傾向があるが、指導者としての経験年数が長いということではないため、保育士としてのスキルを実習生に上手く伝えることができない可能性があることが示唆された。また、実習指導者研修会に関しても、研修会・会議の参加状況から、研修会・会議に参加したことのある先生

方は少ないことがわかった。

【実習指導体制】

▹実習担当者は主任保育士が一番多く（役職で決められている）、年齢は 50 歳代、経験 16 年以上のベテラン保育士だが、指導者の経験は少ない。実際に指導する保育士は就業 5 年未満が一番多い。

▹実習指導のマニュアルの有無・・・有　43%
無　47%

▹実習指導、園内の打ち合わせ・・・共通理解のため実習前に行っている。

▹指導担当者変更時の引き継ぎ・・・有　66%
無　34%

▹指導時に困ったこと・悩んだこと・・・94%

指導者の悩みは本当に多く多岐にわたる。

〇記録物・指導案の書き方
〇学生の態度
〇評価のつけかたなど

【実習指導者研修会・会議】

▹実習指導者研修会の参加状況

参加したことがある・・・・・12%
参加したいと思っている・・・49%
参加したいが難しい・・・・・34%

▹実習指導者研修会・会議参加理由

・・養成校、現場の共通理解のため。学生の実態の把握と理解のため。日誌、指導案の書き方。指導のポイントがわかる。
・・他施設と情報交換、情報共有

▹不参加の理由・・研修会場に遠く、移動に時間がかかる。忙しいなど。

▹開催方法・場所について

・・複数の養成校で行ってほしい。また、研修会と、会議を同時開催してほしい。開催地域は、自園のある地域で行ってほしいという内容もあった。

以上の結果から、研修会に参加したいと考えていても業務多忙のため時間の確保、日程調整が難しく参加できない先生方が多数いることも分かった。研修会開催時期は 5・6 月の希望が多く、調査結果を参考にして参加しやすい環境づくりや研修会・会議等の内容を検討する必要がある。

４．結果２　実習園として重視している項目について

協働するうえで大切であると思われる３項目について自由記述を求めたところ、実習担当者の多くが「意欲・積極性」「向上心・探求心」「実習記録」「子どもの理解」「子どもとのかかわり」について記述している。これは、実習生が目標をもって臨み、積極的に学んでほしいということと、実際に子どもと関わってほしいということである。養成校でも同様の部分について学生にしっかりと伝えた上で実習に送り出してほしいと現場では希望している。しかし、「環境の構成」「健康・安全」「保育者としての倫理観」については、記述が少なかった。環境の構成や健康・安全については実習生に多くを求めていない姿勢をもっていると解釈することができる。自由記述部分に使われている言葉を分析すると、「自分」「積極」「子ども」「理解」等の言葉が多く用いられており、子ども理解に対する積極性を求めていることが明らかとなった。子どもの発達に関しては、実習を通し学んでほしいという考えであることがわかった。これは養成校と保育現場の協働の一つの視点であると考えられる。

５．結果３　養成校と実習園との協働について

「養成校と実習園との協働」ついて自由記述式で各実習園に尋ねた。修正版グラウンデッドセオリーにて分析した。

まず実習前、実習生側の準備として、挨拶・時間厳守等社会常識を心得えることと、支援の方法や環境構成の理解、記録の記入の仕方やピアノ・歌など、保育知識・技術の習得がある。養成校と実習園の準備としては、実習の目的や進め方、学生の性格等の事前把握、また、指導計画の立案や日誌の記入の仕方なども両者で共通理解ができていれば、実習をスムーズに進められる。そこで、実習前に実習園に来てボランティアや事前体験を行い理解を深めることで良い実習につながる。

実習園からの要望として、日誌等様式の統一、実習の手引きの配布、学生育成方針の明確な提示があるとよい。

次に実習園が期待する保育実習の効果は、保育の楽しさ・やりがいを学び、成長し、保育士として将来就職につなげることである。また、実習生を受け入れることによって、保育の質の向上や、最新の情報を得ることができるということである。課題として、むずかしい実習生への対応があげられる。巡回の際は、学生のことを知っている教員が来てほしいという声があがっている。協働への課題としては人員不足のため業務多忙があげられる。さまざまな課題が緩和され、保育士養成の向上につながる現場と養成校との協働モデルの構築が期待される。

５．考察と結論

結果 1.2.3 を活かした形で、結論として、岩手県における保育士養成の向上につなが

る現場と養成校との具体的な協働モデルの在り方の提言を行う。今回の調査で、養成校と実習園との協働についての知見・方向性を得ることができたので、今後とも研究部会で保育向上につながる協働のあり方を考察していきたい。